慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	『慶應義塾入社帳』に見る中津出身者
Sub Title	
Author	河北, 展生(Kawakita, Nobuo)
Publisher	慶應義塾福澤研究センター
Publication year	1987
Jtitle	近代日本研究 Vol.4, (1987.) ,p.1- 27
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	福澤門下生特集 別表, 付表
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10005325-19870000-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

『慶應義塾入社帳』に見る中津出身者

河北展生

一

慶應義塾の創立一二五年記念事業の一つとして昭和六一年九月に覆刻公刊された『慶應義塾入社帳』全五巻には、幕末の文久三年（一八六三）から明治三四年にいたる三九年間に及ぶ入門生の氏名・住所・年齢・父兄氏名・保証人氏名住所等が記されている。同書索引の凡例によると、「本塾入社帳」（第一～四巻）には、九八八六名の、第五巻の「大阪慶應義塾入社帳」以下「幼稚舎入社帳」に至る八種の入社帳には、一七六五名の氏名が記載されているとある。

これらの人々は、わが国が、欧米諸国により開国させられ、怒濤の勢いで押し寄せる西欧文明の波にもまれ、この新事態に向かって自ら西欧文明を学び、未知の経験と習慣の違いに戸惑いつつ、悪戦苦闘しながら何とか身を以て対応し、どうにかわが国の独立発展を守り育てて来た人々である。その意味で我国近代史研究の上に誠に貴重な資料を提供したものと言わなければならない。

この『慶應義塾入社帳』（以下単に『入社帳』と呼ぶ）から、約一六〇名の中津出身者を拾うことが出来る。一覧表に掲げた人数は、①中津出身と記載している者　②小倉県と記載しているが（中津県は明治四年一一月一四日小倉県、九年四月一八日福岡県となり、九年八月二一日大分県に合併された）、本人氏名保証人等から推定した者　③住所が他の地区になっているが父兄氏名等から出身者の子弟であると推定した者等である。今後調査が進めばその数が増えることが予想される。

現在の大分県は旧幕時代の天領日田と臼杵（稲葉氏）五万石・日出（木下氏）二、五万石・佐伯（毛利氏）二万石・森（久留島氏）一、二五万石・府内（大給氏）二、一万石・岡（中川氏）七万石・杵築（松平氏）三、二万石の諸藩と、中津（奥平氏）一〇万石とから成っている。中津は慶應義塾の創立者福澤諭吉の郷里であり、奥平家一〇万石の城下町ではあるが、東京に遠く必ずしも便利の地とは言えない。

〔別表1〕の「中津・大分県（除く中津）出身者年次別人数表」に示すように、大分県最大の城下町とは言え、一〇万石にしか過ぎない此地から、一六〇名という人数が、然も創設から九年間に、幕末動乱期という悪条件下にもかかわらず、全入塾生の半数の七七名が集中しているということは、そこに特殊な事情が存在したものと考えねばならない。本稿はその辺の特殊事情がいかなるものであったのかについて、全体を廃藩の明治四年まで、以下一〇年間毎の計四期に分け、第一期に重点を置いて若干の考察を試みるものである。

二

幕末の五年間は、義塾の創設期であり、また尊皇攘夷論が強く主張された時代で、洋学を研究するだけで、攘夷論者から排斥され、時には生命の危険さえ感じられる時代であった。そのうえ洋学はまだ蘭学が主流を占め、

英学はようやく始まったばかりである。その時期にあえて挑戦する者の決意が如何なるものであったかは、想像に余りある。

文久二年（一八六二）福澤は遣欧使節の随員として、一年にわたりつぶさに欧州の実態を実見し、洋学、特に英学教育の緊急であることを痛感し、ロンドンから中津藩に英学校の創設の必要を建白した。しかし帰国してみると、世情の急変で不可能と判り、断然自ら学校経営を決意し、取敢えず英学塾を発足させたのが、文久三年春である。（小論「慶應義塾後期砲州時代の意義」史学四十九巻　第二・三号参照）

文久三年は朝廷を利用した長州藩の圧力で幕府が攘夷の方針を呑まされ、長州藩が下関で・薩摩藩が鹿児島湾で外国艦と交戦し、八月一八日政変で過激攘夷方針が否定されるなど、情勢が極めて不安定な時にもかかわらず、福澤諭吉は特に十分な学校設立の準備もなしに、この年春に学校を発足させている。全入塾者はこの年一〇名に過ぎない。末尾の〔別表2〕「中津出身　慶應義塾入社生　入門年月日順一覧」に示すように、そのうち中津藩士が三名入門している。和田兄弟と小幡杏平（弥）である。

前年参勤交替制度が改革され、藩主家族を初め大部分の家臣が江戸を離れ帰国するという時期であった。中津藩では亥年の建白事件と呼ばれる、江戸家老奥平壱岐排斥運動がおこり、藩内は大きく動揺していた。その中で敢て未知の英学を志した前記三名と福澤との間に如何なる関係があったかは不明である。強いて推測するならば、和田兄弟の母は猪飼太兵衛正範の娘である。猪飼は諭吉の父百助の大阪蔵屋敷勤務時の上司で、百助とは格式を超えて親しく交わっていた家である。福澤は慎二郎を英国に留学させるため自分の弟ということで、福澤英之助として留学させている。その英之助宛の慶応四年八月頃？　の書簡に、「奥平の官軍も少しづつ戦争に掛り候よし。定てまけ候事に可有之……隊長殿は猪飼のおじさんなり、致方無之次第に御座候。」と極めて親しげな表現を

している。また小幡は医師の長男で、母は福澤が少年期一時学んだ儒者の野本家の出である。これらの点から、或いは福澤諭吉の意見に賛成している猪飼や野本の薦めがあったことも考えられる。

翌元治元年（一八六四）は、熊本藩士九名、薩摩藩士六名等全体で三六名の入塾者を見た。この年福澤が、学塾経営の中心人物を求めるため中津に帰国し、小幡篤次郎等六名の俊秀を伴って帰府した意図については、前記史学の小論で考察した如くである。

慶応元年（一八六五）入塾者は全体で五八名と順調に増加した。しかも出身地も関東・東北・中部・北陸・近畿・中国・四国・九州と全国的に分布してきた。九月、四ヵ国連合艦隊が大阪湾に渡来し、その圧力もあり安政の通商条約が勅許された。外交・貿易問題が重要になって来ることは明白で、従って英学教育を一層盛んにする必要が認識されてきたように見える。然るに中津藩からは、神尾・古宇田・佐伯の三名が入塾したに過ぎない。

この傾向を憂えた福澤諭吉は、慶応二年二月中津藩の実力者島津祐太郎あてに、英学生育成の緊要性を、強い調子で訴えている。

「両三年来江戸の形勢も一面目を改め専ら西洋法に赴き、既に公儀にては横浜え英仏学校御取建相成、……追々人物も出来申候。就ては諸藩にても自から其風に従ひ何れも西洋学の心配いたし、諸所より出府のもの多く、先を争ひ開国に進歩いたし候姿に御座候。然處奥平家においては今日に至るまで無其義、……中津に文学の教なし。世間見ずの田舎風にて、才も不才も門地を以て無上の天爵と思ひ、世間普通の道理を知らず、……憂国の者は又之を救ふの策を設けざるべからず。則其策は文学（此迄の漢学にあらず趣意は或云随筆に詳なり）を盛にするなり。……従ては富国強兵の道も開け可申哉に存候。就ては唯今官府の命を以て貴族の子五十人計洋学執行被仰附候様致度候得共、昨今中津の勢中々右様の場合に無之は人の知る所にて、喋々と弁論建白するも亦愚なり。依て凡そ御家中に報国の意あらん者は自分にて思立、当主にて壮年の者は自ら執行に出で、老年にて男子ある者は其子を出し、漸々に誘引するより外

に策略有之間敷、先生は中津にて人望を得、人の標的に候得ば、先づ御令息様を御指出し被成度、其外大夫方の男子も如何様に歟御説諭被成、洋学執行為致度。」

右の説得が効果を揚げたのか、慶応二年には、全入塾生六八名の内中津から一一名を数えるまでに増加している。右の一一名の中、「供番」の家格の者は、桜井、武藤、築、土岐の四名とおそらく岡見もこれに含まれると思われる。「小姓」の家格の山崎、桜川の両名までが上級士族で、「供小姓」の八田と「組外」の鈴木が下級士族に含まれる。佐野、堀内に付いては今明らかでない。桜井は小幡篤次郎の従兄弟、土岐は福澤夫人の弟である。佐野はのち東京に出て新銭座で医師となっている。八田の父小雲はペリーが浦賀に来たとき、藩命を受けその視察に派遣されている。おそらく気の利いた人物で、時勢の変化についても敏感に感ずる処があったのではないかと思われる。永く福澤とは交渉を持った人である。二、三の人を除いて福澤との関係を伺はせるものが無い点から、島津らの奨励策によるものかと思われる。

三

翌慶応三年と明治元年の二ヵ年は幕府の崩壊、官軍の江戸城占領、会津戦争等の政情不安もあったが、全入塾者は九三名、九四名とかえって増加している。ところが、中津藩の場合は、慶応三年には原岡一人のみで、翌年即ち明治一年には工藤以下四名をみるに過ぎない。長州再征問題で幕府軍に参加していただけに、幕府軍の敗戦と長州藩の反撃の心配や、大政奉還・王政復古・東征軍の派遣・幕府の崩壊と急変する政情に対する譜代藩の動揺、新政府の討幕軍への出兵命令など、藩の存亡にかかわる問題が、大きな原因になっていたものと言えよう。

慶応三年には、福澤諭吉は塾に於ける教育方法の近代化の一として、学生全員に同一教科書を持たせることを

考え、大量の英書を安価に購入するため、一月小野友五郎の軍艦購入遣米使節団の一行に、依頼して参加し、六月帰国した。ところが渡米中小野との間に問題をおこし、帰国するや小野が幕府に訴え、福澤は謹慎を命ぜられ、書物等の荷物が差し押さえられてしまった。一〇月謹慎は解除されたが、荷物の引き渡しは遅れ、翌年新銭座に移転して受取った。このような状況に加えて、福澤と藩との間に不協和音が生じていた。中津藩が幕府命令により、長州征伐に出兵することとなり、福澤塾の在塾生に帰国を命じて来た時、福澤が塾生の帰国を止めた。このため国許の父兄が軽い処罰を受ける事となった。国許からの送金が止まった。そのため福澤は中津藩の在塾生を養う為に、外国新聞の翻訳を諸藩に売ってその費用に当てたと言う。長州征伐は二度行われたが、この問題があったのは再征の慶応二年ではないかとおもわれる。

慶応四年（九月明治と改む）福澤は、前年買った新銭座の地に一〇〇名の寄宿生を収容できる塾舎を建設し、鉄砲州の奥平藩中屋敷より移転した。官軍東征で江戸は戦場になりはしないかとの不安と、去就に迷う諸藩は藩士を国許に呼び戻した。一時在塾生は一八名にまで減少した。四月江戸城開城、五月上野の戦争にもかかわらず、福澤は一日も学業を休まなかった。しかも四月に学校の組織を、英国のパブリックスクールの制にならい、新しい学校に改め、時の年号をとり、「慶應義塾」と命名し、教える者、来学する者が共に社を結んで学塾を経営するのだという。今日の法人組織的な理念である。これを社中と呼び、或いは卒業生を塾員と呼ぶ事は今日まで続いている。近代化の先駆者育成の高い理想の実践に一歩を踏み出したのである。

中津藩からの何らかの援助を受け、家塾的な性格を帯びていた是迄の英学塾を、維新の動乱を機会にしたとはいえ、校舎も校地も完全に自分の力で確保し、新しい教育理念と方法を以て、「慶應義塾」という近代的学校を発足させた福澤が、郷里の青年に全く手を差し延べることをしなかったとは考えられない。原岡については不明

であるが、甲斐織衛の入社（明治一年四月以降の入塾者を以下入社生と呼ぶ）については、『慶應義塾名流列伝』（以下『列伝』と略記する）に、戊辰戦争に従軍した甲斐が上京の折福澤を尋ね、英学学習の重要性を説かれたが、直ちに隊を離れる訳にもゆかず一旦中津に帰国のうえ、改めて上京入塾したと記している。これに似ている話に、浜野定四郎が凱旋の途次塾に立ち寄り、福澤に説かれそのまま塾に留まったという。従って、奥平氏を主人と記入している工藤等三名の入社生も、福澤らの薦めによる入社とおもわれる。その時期が七、八月である。八月四日に中津藩兵が日光今市まで進出している事を考えると、この三名は江戸藩邸勤務の者と思われる。

此時期中津藩では前藩主の未亡人芳蓮院を国許に迎える為、生田四郎兵衛、島津祐太郎らが中津から出張している。工藤等三名は或いは島津らの力を借りての説得であったかもしれない。それにしても、国許中津からはまだ学生を呼べる状況ではなかったようである。

四

明治二年榎本らの降伏により内乱が終わり、新政府が開国方針を明らかにし、世情も落ち着きを取り戻すと、義塾への入社生が激増した。二年…二五六名、三年…三三二名、四年…三七一名という数である。新しい時代には新しい英学をといった気運が高まってきた為である。中津藩からも二年…一八名、三年…一六名、四年…一五名の入社生が見られる。中津藩としては異常な増加とおもわれる。

『西洋事情』を著し、文明開化の指導者としての地位を確保し、新時代へ向けて新しい組織の学校を発足させた福澤が、戊辰戦争に従軍した浜野や甲斐を説得した事例が示すように、郷里の人々に無関心でいたとは思えない。幕府が滅び、新政府命に従い会津征討の兵力を出した中津藩は、最早幕府に対する義理立ては無用になっている。

むしろ新政府への対応策を探るために、中津藩のほうから、福澤に意見を求める立場に変ってきたのではないかと思われる。

この年、中津藩は、二月二五日版籍奉還の建白を行い、翌二六日藩制を改革した。上級士族が藩の実権を掌握していて藩体制に変化が無いとも言われているが、奥平図書、生田実らが執政に、猪飼太兵衛、鈴木力兵衛らが大監察に、津田範曹、島津祐太郎らが議員になり、開明派が藩政に発言力をもつようになった。六月一九日奉還が許可され、藩主が藩知事に任命されると、一一月三〇日、藩の職制を改革し、大参事に逸見志摩・桑名豊山、権大参事に岡見平大夫・猪飼太兵衛・鈴木力兵衛、小参事に佐竹四郎ヱ門・菅沼新五ヱ門・福田清兵衛らが就任している。軍制改革がおこなわれたり、洋学研究の奨励策が進められた。格式威張の強かった中津藩にとっては大きな変化である。

明治二年四月十七日付の藤本元岱宛福澤諭吉書簡に「中津にも追々洋学御開相成候よし。弥以真に其思召有之、相当の学校にても出来候節は、小生も折々は中津へ参り可申」と記している。

前年島津祐太郎等が上京したとき、かねて福澤の主張に理解をしめしていた島津は、世情の大変化に対し福澤の意見を聞いたであろうと思われる。それまでも、島津の意見は藩内では突飛なものと見られる傾向があったようだが、それが時代の流れを先見していた事が判るにつれ、藩内での評価が高まったと言われている。福澤が洋学奨励の必要を説いたことは想像に難くない。島津らによる藩の洋学奨励策に合わせるように、先年の長州再征時の塾生引き止めの問題は解消したものと思われる。福澤自身による中津の関係者への説得も行われ、多くの入社生を見ることになったのであろう。

明治二年四月、前野春沢が入社している。『入社帳』を見ると慶応四年から形式の調った用紙に記入されてい

る。そこには保証人の住所氏名を記入する欄が設けられている。必ずしも全員が記入してはいないが、入社生との関係をうかがう上で興味ある資料である。前野の保証人に福澤諭吉と自筆で記入されている。福澤の『入社帳』保証人署名としては最初のものである。前野は蘭学の開祖前野良沢の子孫である。恐らく洋学の大先輩への敬慕から、福澤自身が署名したものと思われる。

五月には小幡英之助と中上川彦次郎が入社している。英之助は小幡篤次郎の従弟、彦次郎は福澤の甥である。この保証人として小幡篤次郎と福澤が署名しているのは当然であろう。彦次郎の義塾入社について、『中上川彦次郎先生伝』は

先生夙に舅父—福澤諭吉の名声を慕ひ、切に洋学修行の志あり、慶應三年十四歳の時、すでに藩廳に出願して、江戸に留学を命ぜられんことを請うたが、頑迷固陋なる一部藩吏の妨げるところとなつて聴されなかつた。……明治二年先生は十六歳で、初めて藩廳から東京留学の辞令に接することが出来た。

と記している。福澤がかねてから彦次郎等近親者に、洋学修行を薦めていたことが判るとともに、彦次郎が留学を決心したのに、藩内に反対者があった為に許可が下りなかったというのは、前述した長州再征の時の藩命に福澤が反対した為であろう。それが此度は許可されているのは、藩内の情勢が変化した事を物語るものであろう。

一〇月二五日に一挙に七名が入社している。中野松三郎は小幡甚三郎が保証人で、他の六人は浜野定四郎が保証人となっている。中野は『列伝』には浜野覚蔵の甥で幼少の時から覚蔵に師事したとある。従兄弟にあたる定四郎が特に保証人を避ける事は異常である。『下毛郡史』によると、橋本塩巌に一〇年余師事し、明治一年日田の咸宜園に入っていたが、洋学修行の藩命により義塾に入社したという。浜野への師事については何も記していない。前記のことと併せ考えると、おそらく『列伝』の誤伝であろう。浜野保証の入社生の中に福澤の従兄弟の

子藤本菅太郎・寿之助兄弟がいる。この両人は福澤の薦めに依り入社したものであろう。

五

明治二年福澤は、一時養子になっていた叔父の中村術平の死亡を聞いた。母と同年であるだけにそれはショックであったに違いない。「叔父様御死去に付ても尚又被案候は母の義に御座候。当年六十六歳、御同年、兼て達者には候得共、不定の身、何分にも御心添奉願候。」と記し、東条・藤本・渡辺の親戚の人々に大酒の害を述べている。その後母の東京移住を願って色々説得を試みている。しかし母の決心も定まらない間に、三年五月福澤はチフスに罹り、一時危険な状態となった。このため母への説得が一段と強められ、漸く母も上京を決心したので、三年閏一〇月末、母を迎えるため中津へ出発した。

中津に帰り母と相談した結果、母の了承を得ることが出来、共に上京する事となった。諭吉が安政一年長崎へ蘭学修行の為中津を離れてから、途中安政三年兄弟で病後の保養と、兄三之助の死亡により暫くの間中津に帰っていた時期と安政五年藩命で蘭学塾を開くため出府する前に一時帰国した時を除くと、実に一五年振りに母子が一緒に住むことになったのである。福澤にとって大きな喜びであったろう。中津滞在中、藩の重役から藩政に関して意見を求められ、家老雨山家に招かれ、武備の全廃と洋学校の設立の必要を説いた。武備全廃については反対意見があったが、藩の重役が福澤の意見を聞こうとするまで、その気運は大きく変化してきていた。福澤は中津を引き揚げるに際し、「中津留別書」を書いて、洋学の必要を強く訴えた。此時従弟増田宋太郎が諭吉の暗殺を企てたが未遂に終わった。普段用心深い福澤がこのときは全く安心していたというのは、中津藩の気運が大きく好転していた事が、福澤の警戒心を緩めたものと思われる。福澤は母、姪のほか今泉一家及び入社希望の青年

達を伴って、一二月四日宇の島港を出帆したのである。

山口半七の自序伝『大分県の耆宿山口翁』によると、山口は三歳年長の手島春司と親しく、漢学修行の為共に他所遊学を志していた時、福澤が甥の中上川を伴い帰郷し、その薦めと、中上川の漢学無用論に動かされ、義塾入塾を決心した。帰京の一行は同書によると、「先生を首め中上川の外老母及び先生の実兄三之助の長女即先生の令姪、今泉家未亡人並に秀太郎並に遊学志願者生田晋、土岐八郎、甲楽城勝太郎、中村英吉及吾輩、生田晋の付き添人舟橋渉等十二名亦盛なりと謂ふべし」という。

明治三年の入社生は一〇月までに八名、一二月福澤に伴われ入社した者らは八名の一六名である。甲斐織衛の弟鍊三郎が五月に、福澤が最も信頼している藩の重役島津祐太郎の長男万次郎が八月入社している。一二月入社生のうち生田晋は「大身」四郎兵衛家の出で、福澤の理解者の一人で、のちに中津市学校がその屋敷に置かれた。また中村英吉は死んだ術平の実子で、叔父と生前の約束で福澤が教育の面倒を見ることになっていた。上京途中の福澤一行は大阪の中津藩蔵屋敷の藤本箭山方に止宿した。このとき大阪の開成所に学んでいた中上川の従兄弟に当たる飯田平作が福澤と彦次郎とに英学を薦められ、また同居していた朝吹英二も、特に彦次郎から英学必要論を説得され、急に上京するにいたった。朝吹は増田宋太郎の同志で、一度は福澤を暗殺しようとしたが未遂に終わったという。それが一変して義塾に入社し、後年日本の近代産業界の重要人物となった。

六

明治四年には一五名の入社生を数えるが、一月に藩知事奥平昌邁が洋学修行のための東京遊学願いを出し、政府の許可を得て一月二六日着府、二月二五日義塾に入社した。さらに『中津歴史』に依れば、この年、藩では和

田克太郎、今泉力太郎らを大阪に派遣し英国式軍制を学ばしめ藩士に新法を伝習させている。六月には藩士に帰農商を薦め、就産金の交付をおこなっている。七月廃藩置県で中津県となった。一〇月「天保義社」が設立されている（藩士からの借上の返済の為別途積み立てられていた金額を版籍奉還の際、新政府に差し出すべきものではないとして、政府と交渉した結果、藩士全体の互助機関の資金とすることが認られ設立された一種の金融機関である）。一一月には藩主の家禄の五分の一の米と「天保義社」よりの二万円を維持資本とし、教師陣は慶應義塾より小幡篤次郎、浜野定四郎等を送り込み、義塾の分校とも言うべき「中津市学校」が設立された。『中津藩史』によると、福澤が立案し旧藩主奥平昌邁の名で発表された市学校設立の趣意書は

学問は身の為にすべきなり。人の為にするにあらず。……旧藩内の士民も余が志を助け余が学ぶ所の道を学ばんとするは固より願ふ所なれば、本県の吏人に謀り年々家禄の内五分の一を費し旧藩士の積金に合して文学の資となし、此度中津に一處の洋学校を開き其外当県内の諸方に郷校を設くるの議を決したれば、旧藩の士族は勿論百姓町人も余が微意を體して勉強致し、三五年の後余も亦外国より帰り互に学業上達の上再会致すべき事、今より楽む所なり。……人為の爵禄に依頼せずして天與の身心を頼み、躬ら身を役し躬ら心労し、藝学を勤め家業を営み、一身不羈の産を立て、其気象を子孫に遺さば、子孫亦独立の一人たるべし。天地の幸福之に若くものなし。

と高い調子で学問の必要を説いている。その結果『中津歴史』によれば市学校は「明治六七年より八九年に至るの間は生徒の数本校付属女学校を合せ凡六百有余人に達し、一時関西第一の英学校なりと世上に公評を博するに至れり。」という程の盛況を呈した。

廃藩前の二、三月には一一名、廃藩後の一〇、一一月に四名が入社している。奥平昌邁と同時に旧藩時の家老家の「大身」の雨山達也、稲毛毎次郎ら一〇名が一団となって入社しているのは、旧藩主に随行したとの感がつよい。雨山家は前年福澤が中津に帰国したとき、意見を聞く為招かれた家である。『列伝』によると、福澤の主

張に賛同した父図書が達也の入社を希望したという。稲毛毎次郎は旧藩時代奥平姓を称した重臣の一つ稲毛家の人で、中津市学校を初め、中津の諸事業や、義塾のことに協力した奥平毎次郎であろうとおもわれる。改革派の一人である猪飼太兵衛の子麻次郎、それに前年末には、同じく「大身」の生田晋が入社している。これらの事から、このころ中津藩の上級士族間に、福澤の主張に賛同する気運が相当広まっていたことは明白であろう。またそれが中津出身者の義塾入社傾向の大きな特色であると言えよう。

一一月入社の浜野牛児の保証人は浜野定四郎、一二月に同時に入社した笹部三二（飯田と改姓）、倉成慎治の保証人は福澤諭吉である。浜野牛児と定四郎との関係は須田辰次郎の談話（明治四二年一二月「慶應義塾学報」）に、「維新の騒動が済んだ後浜野氏は其儘慶應義塾に留まって教鞭を執ることになったので、自然脱藩の姿となったので、浜野家は弟の人が相続する事となった」とあり、分限帳に父覚蔵とあるから、両人は兄弟と思われる。笹部は福澤家と同じ一三石二人扶持で、父は平四郎となっている。福澤が何故保証人になっているか、関係は明確ではない。『列伝』によると、藩主昌邁に侍し漢学を学び、明治三年福澤が帰国した時その説を聞き、大いに感動し洋学修行の必要を力説し、一時周囲から非難されたこともあったという。倉成は中津藩の漢学興隆の中心人物である龍渚の子孫である。儒学よりも洋学こそが新時代に必要な学問であるとは、福澤の持論である。倉成がその説を受け入れて入社したことは、福澤にとって大きな喜びであったと思われる。

この年中津藩の人々は廃藩と言う大変化に直面した。世情は予想以上に変化している。この年の前半までは、一般にはとかく保守的になりがちな藩主や重臣層が先頭に立って洋学への道を進め、相当の人数が義塾に入社している。後半の四名の入社生をみると、藩の奨励策に乗っての入社ではなく、福澤や義塾関係者の薦めによる入社という傾向をはっきり読み取ることが出来るように思える。

七

明治五年から一四年までの間に義塾に入社したのは、二四名である。前の九年間に比べて、入社生の数が著しく減少している。廃藩に伴う士族階級の失業、不平士族の反乱、その最後で最大のものが、西南戦争となり、戦後のインフレーションが不景気を招いた。他方学制頒布で公立の中学が整備され、遠方の私立学校に子弟を送る者が減少した。そのため義塾への入社生数は急激に減少し、経営難に陥った。

明治五年から九年にかけて出版された『学問のすゝめ』は、青年のみならず、広く国民に新時代建設のためには、学問の必要であることを訴えた。三田の慶應義塾への期待と評価は高まったが、現実に入社してくる者は減少していた。慶應義塾維持資金の借用運動に苦慮する福澤が、明治一二年三月に記した宛名不明の書簡に、廃藩後の風潮を次のように記している。

我国廃藩置県の一挙よりして、百般の事物面目を改めて便益なるもの固より多しと雖も、又一方より従て生ずる所の弊を論ずれば挙て言う可らざるものあり。就中全国の士族が其食禄を失ひ一時方向に迷ふて困窮する者少なからず。……食禄と共に数千年来養ひ得たる尚武廉恥の気風をも共に消滅して跡なからんとするの勢あるが如し。……彼に心酔し、彼に恐怖し、内国士人の気象をば日に月に消滅するに任して、又随て之を消滅するを助け、無気力の文弱に陥るを見て得意の顔を為すが如きあらば、我が日本国は遂に文を以て斃るゝに至る可し。されば今の時に当て国を保護するの要は、文を修めて兼て又武を勉め、士人の気風を振起するに在ること固より論を俟たず。

中津藩が中津県となったが、天保義社の資金と旧藩主よりの補助により、一一月中津市学校が創設された。士族のみならず平民にも新時代に必要な洋学を学ぶ機会を与えるのが目的であった。その中から更に義塾に入って学問を志向する者があったのは当然であろう。旧藩の奨学方針と相まって成果が期待された。しかし同じ一一月

小倉県に併合されて、中津だけの独自性は出せなくなった。廃藩に伴う士族の失業と、これといって有利な特産物のない中津の不景気は、市学校での学習で満足する者や、漸く整ってきた大阪などの学校に学ぶ者が多かったようである。

不平士族の反乱が続くなかで、明治一〇年三月、増田宋太郎が西郷隆盛の挙兵に呼応決起した。この混乱に乗じて一揆が発生し、中津も襲撃されそうであったが、この事態に指導力を発揮したのは、旧藩時の開明的な士族達であった。その士族達の経済力が悪化しているのに、一般市民の台頭は未だ十分ではなかった。西南戦争後の急激なインフレーションは一層生活難を強くした。これが前記の低い入社生数となって現れたのであろう。

この一〇年間に入社した者をみると、福澤の親戚など関係の深い者がかなり居る。小田部他吉は姉の嫁いだ小田部利八の一族かとおもわれる。手島春司は母方の叔父の兄物斉の長男、今泉秀太郎は妻の姉の子である。服部光吉は小幡篤次郎の親戚で福澤が幼少の時手ほどきを受けた五郎兵衛の長男、津田俊郎は兄純一が、浜野清四郎も兄牛児が入社している。中金倍は福澤と関係深い奥平壱岐（本姓中金）の養子である。中金の如き「大身」の者も居るが、やゝ下級士族が前期に比して増加しているようである。ここで注目されるのは、室屋、今永の二人の平民の入社である。室屋は商人であるということ以外不明であるが、今永は福澤が中津で最も信頼し教えを受けた白石照山塾の後輩である。おそらく中津近辺の豪農の子弟であろう。明らかに入社生の傾向が変化して来ている。

八

明治一五年から二四年の間の入社生は四二名と、前期に比べてやゝ多い。その原因は複雑であり、俄に定め難いが、地域の経済的な活性化もその重要な一因をなしていると言えよう。中津では明治一一年に旧藩士の金禄公

債を原資として、第七十八銀行が山口克己（半七）の父山口広右衛門（明治以降広江と改）を頭取として設立された。翌一二年一二月には士族授産事業をより効果的に推進するため、この年和田基太郎の父弥太郎らが中心となり、士族から一株一〇円で一〇八株、天保義社から一五〇株の出資を資本に、製糸会社「末広会社」を創立した。一三年会社は製糸見習いのため福澤の援助を受け、富岡製糸場に女工二五名を派遣するなどして操業を開始したが、そのための投資が大きく、前途が心配されたので、岩田茂穂らが国および県へ起業基金の貸与運動を行い、一四年四月、九、四二八円の貸与を得た。会社は貸与金の大部分を桑園の拡張整備に投資したことで、ようやく良質の原料の安定確保に成功、以後中津の養蚕業と製糸業は二五年頃まで順調に発展した。

福澤は明治一六年九月の時事新報の社説「士族の授産は養蚕製糸を第一とす」の一四日の条（『福澤諭吉全集』第九巻　所収）に、左の如く記している。

豊前中津は米穀を以て関西に有名成る所にして古来養蚕の法を知る者なし。明治十一、二年の頃までは士農を論ぜず養蚕を以て一家の生計を立つる者とては絶えて聞かざる程なりし。然るに其頃よりして漸く養蚕の利を言う者多く随て反対説も喧しかりしかども、士族或は農家の中にて少しく世情に通じたる者は、其信ずる所篤きがため毅然として動かず鋭意新業に従事し、或は男女の生徒を岩代上野等の養蚕地に派遣し、或いは此業に老練の人を聘し来りて其教を受け、新に桑苗を植え付け新に製糸場を設くる等、……随分混雑の事情なきにあらざりしかなれども、大勢は一、二局部の進止に関せず次第に進て次第に速力を増し、明治十五年に至り始めて八梱の製糸を横濱同伸会社に依托して米国に直輸出したるが頗る好評を博し、人心に一層の刺激を加へたり。今十六年は此輸出糸も十四、五梱を出すことを得べき見込なりと

これらの事業の中心には塾員や旧藩開明派の人々が居て協力したことは言う迄もない。

小幡高次郎、雨山健雄、和田角治、東条貞一、浜野政一、桜井信四郎、中上川次郎吉等は塾員社中の子弟或い

は兄弟である。恩田銅吉は小幡英之助の一族である。明治一四年三月中津市学校が廃止された時、その残余の資金を学生の奨学金とするための協議機関「開運会社」が出来、前後三回に分け一一名が選ばれた。そのうち桑原虎治、和田豊治、梅田又八、鈴木小太郎（以上第一回）、佐藤喜代吉（第二回）、林健（第三回）の六名までが義塾に来学している。

また「交詢社会員名簿」（明治一四年）をみると梅田又八の父才三郎は第七十八銀行の役員、鈴木小太郎の父閑雲は下毛郡長である。星野平吉の父季五郎は「供番」の上級士族であったが、このころは呉服商を営んでいる。中島文吉の父精一は慶應義塾出版社の社員である。末貞武次郎の父友年は第七十八銀行の副支配人である。交詢社会員では無いが、黒沢覚路の父庄右ェ門は幕末の藩の財政改革に功績のあった人で明治に入って、中津の経済界に活躍し、当然上記の義塾社中或いは交詢社々員の人々と深い関係を持っていた。それに奥平家関係の昌吉、九八郎と奥村信太郎を加えると、全体の半分以上が義塾との深い繋がりを持っていることになる。交詢社関係の人の子弟が目立って来たことは、此期の特色であろう。

右のような傾向は次の二五年からの一〇年にもよく現れている。此期間の入社生は一三名に過ぎない。この原因は明らかではないが、全国的に諸学校が整備され、必ずしも慶應義塾だけが新文明を教える学校ではなくなっていること、わが国の産業が発達し有能な学士が各方面に求められ、必ずしも中津の地に留まっていることがないこと。表現を変えれば、多くの人材が中津から全国に、特に中央に移住していったこと等が考えられる。鈴木恒三郎、和田好一、中上川次郎吉、山口龍吉、佐々木政二郎、須田清徳、鈴木四郎、和田秀治の八名は、塾員の子弟又は兄弟である。それに古宇田唯吉の父与九郎は旧藩開明派の上級士族が創立した金融会社鶴屋商店の役員で、勿論交詢社の社員である。こうして見ると、三分の二が義塾に深い関係を持っているわけである。

九

幕末から明治三四年に及ぶ『入社帳』に見える中津出身者について概観したが、最初の九年間、即ち旧藩時代の入社生の異常とも思える数は、福澤諭吉の直接、間接の影響が、重要な原因になっているように思える。福澤は封建的格式威張の強い藩状を嫌い、自ら求めて中津の地を去っている。しかし中津は父母の国であり、少年期を育ててくれた郷里である。むしろ旧藩が時代に遅れ取り残されることが見えてくれば来る程、何とかしなければという焦りに似た愛郷心が湧いてきたようである。しかし福澤は理想実現の為には、静かに一歩退いて、冷静にその実現のための方法を工夫実践する人である。封建性が強い中津だけに、まだ一三石二人扶持の小倅がと言う感情が先行して、素直に自説が受け入れられない事を知っていた。従って福澤の意見に理解を示す人を通して、気長に説得したりしているのである。さらに明治四年になっても、なお中津市学校も小幡篤次郎を表に立て、藩の洋学奨励策も島津祐太郎や服部五郎兵衛などを通して推進してきたと言えよう。こうして見ると、旧藩期の洋学奨励策は、福澤の念願が次第に実現してきたと見る事が出来る。ここに他の藩では余り見られない上級士族が先頭に立っての洋学修行奨励という大きな特色が出ているのである。

第二の特色と思われる点は、兄弟、親戚または子息の入社が多いことと、初期の義塾に中津出身の者が多い事もあって、塾員の保証人が極めて多いという事である。福澤の教育に対する共鳴というだけではなく、独立自尊の人間として、他人の権利と自分の権利を弁えたうえでの社中協力の精神が理解されて居たことによるものと思われる。中津における鶴屋商社・天保義社・末広会社・中津市学校・第七十八銀行等を始めとする諸事業における協力関係、中津公会・「田舎新聞」の刊行・亦一社・明治庚辰講演会等の言論活動は、いずれも塾員等がその

中心に居て、互いに協力している。その意味で、明治初期の中津人の産業・文化の面での影響はまことに大きいものがあった。

福澤は、我国は文明の半開の国である。我国の独立を確保する為には、西洋との戦争を避け、平和に交易関係を維持すべきであると主張した。それと同時に文化が低く産業力の弱い国は文明国に支配され、実質的な独立国として対等には扱われない。従って、一日も早く西洋文明を取り入れ、民力の充実、産業力の強化育成を念願していたのである。明治五年五月一一日付けの福澤英之助宛の福澤諭吉書簡で、

此度中津へ参りても、旧同藩の人には商工の業を勧め、或は小生の姉などは江戸へ同道、何か活計の道を得せしめる積りなり。義塾の社中も同様、唯に読書々々といはずして商業に移り候様相談いたす覚悟なり。何卒御同様一生涯の事を謀り度、或は商法は素人学者にむつかしゝと云ふ者あれども、大なるミステーキなり。心を正ふし事物の理を弁じ始て真の商人となるべきなり。その所謂世間の商人は我輩の目を以て見るに真の商人にはあらず。世の中に封建世禄も既に潰れたり。この潰れは独り大名のみにあらず。大名抔へ関係せる大商も共に潰るべき理にあらずや。鴻の池、加島屋の滅亡近きにあり。我文学の社中これに代はらざるべからず。

と述べている。いたずらに時の政府に寄生して特権商人として利益のみを追求してきた従来の商人に代わり、今後は文明社会の識見と見透しを持つ独立自尊の学士が活躍すべき時代になって来ている事を強調しているのである。

日津会社・豊中製糸会社の創立等繊維産業に活躍した塾員山口克己（平七と改名）が、中津紡績会社を創設したが、数年にして一部の強い反対を押し切って、鐘紡との合併を断行した理由を、『大分県の耆宿山口翁』で

中津紡績の創立は株主の利益を計るべき目的なりとは云へ、兼ねては又中津繁栄の一手段として発起したるものに外ならず、……一朝中津紡績が創立せらるゝや（中津近郊の）此等村落の形勢は著しく変化を見たり。其の一証と云ふべきは蠣瀬新町下浜に小前人の出入する質屋三軒ありて、村民が困窮する丈け質屋の出入は頻繁なる事とて三軒共に

相当の繁盛を極め居りたるに、可憐なる少女の働は実に侮るべからざるものありて年を逐ひ月を経るに従ひ村民の質屋通ひは次第に減少し、結局質屋は廃業の止むなきに至れること是なり、吾輩痛切に其の当初の期待に背かざりし事を喜ぶの情に堪えず。嗚呼中津紡績は既に消滅して跡なしと雖も、鐘ヶ淵紡績会社は依然厳存し彼の煙突の煙絶へざる限りは永久に中津及び其付近に多大の利益を齎す事を思へば、会社創立一半の目的は達したるものと云ふを妨げず。

と述べている。福澤の思想の一端を身をもって実践したものと言えよう。

〔別表1〕 中津・大分県(除く中津)出身者年次別人数表

年　号	中津出身	大分出身
文久三年	3	0
元治一年	6	0
慶応一年	3	1
二年	11	0
三年	1	1
明治1年	4	0
2年	18	0
3年	16	7
4年	15	13
5年	6	20
6年	2	8
7年	5	5
8年	1	12
9年	3	12
10年	1	3
11年	1	3
12年	2	0
13年	1	1
14年	2	9
15年	4	12
16年	8	7
17年	6	3
18年	4	2
19年	8	2
20年	4	5
21年	4	9
22年	1	7
23年	2	9
24年	1	5
25年	0	10
26年	1	9
27年	2	0
28年	0	3
29年	0	6
30年	3	10
31年	3	4
32年	0	4
33年	3	5
34年	1	5

〔別表2〕 中津出身 慶應義塾入社生 入門年月日順一覧

氏名	入社帳巻頁	入社年月日	父兄及び記事	家格	保証人
和田克太郎	①〇〇二	文久三年初夏	父治右ヱ門	供番	
和田慎二郎(福澤英之助)	①〇〇二	文久三年四月	克太郎弟	供番	
小幡杏平(弥)	①〇〇二	文久三年四月	玄厚長男	小姓	
小幡篤次(二)郎	①〇一三	元治一年六月	篤蔵　後に分家	供番	
小幡仁(甚)三郎	①〇一三	同　右	篤次郎弟	供番	
浜野丑之助(定四郎)	①〇一三	元治一年六月	父覚蔵	供小姓	
三輪光五郎	①〇一四	元治一年六月	父丈助	家中	
小幡(野本)貞二郎	①〇一四	元治一年六月	玄厚次男	医師	
服部浅之輔	①〇一四	元治一年六月	父五郎兵衛	供番	
神尾久吉	①〇三七	慶応一年四月二〇日	父雄策	中小姓	
古宇田松吉	①〇五二	慶応一年九月一八日	父次郎大夫	供番	
佐伯左中	①〇五七	慶応一年一一月二二日			
桜井恒次郎	①〇六四	慶応二年三月下旬	父紋兵衛	供番	
武藤吉二郎	①〇六四	慶応二年三月下旬	父嘉兵衛	供番	
山崎雲林	①〇六四	慶応二年三月下旬	父市蔵　雲林「医師」(芝新銭座にて医師開業)	小姓	
佐野諒元	①〇六五	慶応二年四月一日			
築　三次郎	①〇七四	慶応二年七月二四日			
岡見卯三郎	①〇八三	慶応二年一一月一五日			
八田朋之助	①〇八五	慶応二年三月？	小雲	供番	
桜川正太郎	①〇八五	慶応二年一一月			
堀内仁四郎	①〇八五	慶応二年一一月			
鈴木藤益	①〇八五	慶応二年一一月			
土岐謙之助	①〇八五	慶応二年一一月	父太郎八	供小姓	
原岡弥次郎	①一〇九	慶応三年四月一五日		小姓	
工藤秀太郎(精一)	①二一四	明治1・7・21	父精助　木挽町住	組外	
				供番	

氏名	入社帳巻頁	入社年月日	父兄及び記事	家格	保証人
高橋豊太郎	①二一六	明治1・8・13	父宗介　木挽町住	供小姓	
富山慎之助	①二一七	明治1・8・13	木挽町住		
甲斐織衛	①二二五	明治1・11・1	父喜兵衛	供番	
岡見健太郎	①二四五	明治2・3・13	父稍	供番	
前野春沢	①二五三	明治2・4・4	父瀬庵（良沢子孫？）	医師	福澤　諭吉
安藤朝彦	①二五七	明治2・4・13	父善四郎	小姓	
熊谷民三	①二五七	明治2・4・16	父仁兵衛	供番	
小幡英之助	①二六一	明治2・5・9	父孫兵衛	供番	小幡　篤次郎
中上川彦次郎	①二六六	明治2・5・8	父才蔵	供小姓	福澤　諭吉
津田雅之助（純一）	①二七二	明治2・8・16	父幾衛門	供番	小幡　篤次郎
山崎　渚	①二七二	明治2・8・16		家中	小幡　篤次郎
川田慎吾	①二七三	明治2・8・16	父良兵衛	供小姓	小幡　篤次郎
須田辰次郎	①二七八	明治2・9・3	父半弥	供番	小幡　甚三郎
恩田登橘	①二八五	明治2・10・25	父源兵衛（金兵衛？）	供番	浜野　定四郎
久恆右五郎	①二八五	明治2・10・25			浜野　定四郎
中野松三郎	①二八五	明治2・10・25			小幡　甚三郎
萩　友之進（友五郎）	①二八六	明治2・10・25	父権曹	供番	浜野　定四郎
佐竹土太郎	①二八六	明治2・10・25	父儀右ヱ門	供番	浜野　定四郎
藤本菅太郎	①二八六	明治2・10・25	父元岱	供小姓	浜野　定四郎
藤本寿之助（寿吉）	①二八六	明治2・10・25	元岱次男	供小姓	浜野　定四郎
高木喜一郎	①二九五	明治2・11・29	父小左衛門	供番	
黒屋順之助	①三一四	明治3・3・6	父雑太	家中	
島津荘次郎	①三三五	明治3・5・23	父文三郎	供番	
菅沼経吉	①三三五	明治3・5・23	父重	供番	
甲斐鎮三郎	①三三五	明治3・5・23	父喜兵衛　兄織衛	供番	
生田陸次郎	①三三五	明治3・5・23	父利右ヱ門	供番	
岡見周助	①三四四	治明3・8・14			

島津万次郎	①三四四	明治3・8・22	父祐太郎	供番
小幡微之進	①三五二	明治3・10・5	兄永島貞次郎	供番
飯田平作	①三七九	明治3・12・21	父弁造(母中上川氏)	供小姓
今永洪造	①三七九	明治3・12・21	父一敬	
生田　晋	①三八〇	明治3・12・21	父実	大身
山口克己(平七)	①三八〇	明治3・12・21	父広右ヱ門	供小姓
土岐八郎	①三八〇	明治3・12・12	父国之助	供番
甲楽城勝之助	①三八〇	明治3・12・21	父喜八	供小姓
君島重太郎	①三八一	明治3・12・21	父才一	小性
中村英吉	①三八一	明治3・12・21	兄正九郎(術平実子)	小役人
滝沢　壇	①三八三	明治4・2・25	父伝蔵	小姓
稲毛毎次郎	①三八三	明治4・2・25	父奥平市平衛	寄合
阿知波　浩	①三八四	明治4・2・25		
猪飼麻次郎	①三八四	明治4・2・25	父正典	供番
奥平昌邁	①三八四	明治4・2・25	実父伊達宗城・昌服養子	藩知事
渡辺信太郎	①三八四	明治4・2・25	父孫一	供小姓
中村恭三郎	①三八五	明治4・2・25	父新左ヱ門	供番
山家　繁	①三八五	明治4・2・25	父繁之助	供番
津田雄蔵	①三八八	明治4・2・28		
雨山達也	①三八八	明治4・2・29	実父佐伯藩戸倉六郎兵衛・図書養子	大身
永田一二	①三九〇	明治4・3・12	父源兵衛	
角　堅吉郎	①四七三	明治4・10・23	兄半右ヱ門	供番
浜野牛児	①四八三	明治4・11・28	父覚蔵(定四郎の弟)	
笹部(飯田)三二	①四八八	明治4・12・13	父平四郎	供小姓
倉成慎治	①四八九	明治4・12・13		小姓
小田部他吉	①四九七	明治5・1・28	父武右ヱ門	供小姓
手島春司	①四九八	明治5・1・28	父物斉	儒者
岡見三雄	①五一〇	明治5・4・3	兄修二	供番

			小幡　篤次郎	
			井ノ口　精一	
			浜野　定四郎	
			福澤　諭吉	
			福澤　諭吉	
			浜野　定四郎	
			浜野　定四郎	
			浜野　定四郎	

氏名	入社帳巻頁	入社年月日	父兄及び記事	家格	保証人
岩田茂穂	①五二二	明治5・5・28	父耕路	供小姓	浜野　定四郎
中金　倍	①五二七	明治5・6・18	実父奥平兵庫・壱岐養子	大身	小幡　篤次郎
南摩昇次郎	①五六一	明治5・11・6		供小姓	須田　辰次郎
佐竹古稀知郎	①六〇五	明治6・6・30	父四郎	供番	須田　辰次郎
今泉秀太郎	①六一〇	明治6・7・9	父郡司	供番	福澤　諭吉
恩田義三	①六三八	明治7・2・9			小幡　篤次郎
村松山三郎	①六三八	明治7・2・9			小幡　篤次郎
室尾佐太郎	①六七一	明治7・6・22			室尾　慎作
中村裳吉	①六八一	明治7・9・17	父慎作	商	中上川　彦次郎
尾林達三	①六九三	明治7・11・9	父宗太郎	供小姓	須田　辰次郎
黒沢久蔵	②〇三四	明治8・10・18	聴雨長男	供小姓	小幡　篤次郎
築　弟三郎	②〇七二	明治9・4・3	養父七郎(岩田に復籍)	供小姓	小幡　篤次郎
三原国一郎	②〇七七	明治9・4・25	父浅右ヱ門	供番	甲斐　織衛
服部光吉	②〇九一	明治9・9・15			小幡　篤次郎
万邊亀三郎	②一五五	明治10・5月	五郎米長男	供番	佐野　諒元
津田俊郎	②二三五	明治11・10・31	理久造長男		猪飼　麻次郎
和田基太郎	②二六〇	明治12・2・21	兄政(雅)之助	供番	小幡　篤次郎
浜野清四郎	②二九二	明治12・10・13	弥六郎長男		浜野　定四郎
佐々木勇太郎	②三四八	明治13・11・17	兄牛児	?中小姓	小幡　篤次郎
今永忠司	②三八一	明治14・5・7	吉十郎長男	家中	浜野　定四郎
桑原虎治	②三九一	明治14・6・3	兄達三	平民	梅田　波治
和田豊治	②四四二	明治15・1・10	叔父中村丑吉	家中	小幡　篤次郎
小幡高次郎	②四九七	明治15・5・6	父薫六		小幡　篤次郎
石川謙吉	②五一〇	明治15・9・6	篤次郎	供番	村田　淳良
林　健	②五〇三	明治15・9・12			東条　軍平
雨山健雄	②五四九	明治16・1月	大八長男	大身	雨山　達也
梅田又八	③〇一六	明治16・4・30	兄達也	供番	小幡　篤次郎
			才三郎長男		

鈴木小太郎	③〇一六	明治16・4・30	閑雲長男	供番	小幡　篤次郎
星野平吉	③〇一七	明治16・5・2	季五郎嫡男	供番	
戸倉格之丞	③〇四一	明治16・9・5			
高木利太	③〇六一	明治16・10・29	父寅二郎	供小姓	高木　寅二郎
久恆一雄	③〇六七	明治16・11・1			小幡　篤次郎
奥平昌吉	③〇六七	明治16・11・15	昌服　長男	華族	
大坪芳太郎	③〇七五	明治17・2・2	寛米四男		飯田　平作
和田角治	③〇八〇	明治17・3・1	克太郎長男	医師	築　雅路
東条貞一	③〇九六	明治17・5・12	軍平長男	供小姓	東条　軍平
瀧沢勝彦	③一〇五	明治17・9・5	直作長男	小姓	瀧沢　直作
奥平九八郎	③一一二	明治17・9・5	昌邁長男	華族	奥平　昌邁
浜野政一	③一一三	明治17・8・1	定四郎長男		浜野　定四郎
中島文吉	③一三五	明治18・2月	精一長男		中島　精一
佐藤喜代吉	③一四四	明治18・4月	虎鹿長男		飯田　平作
恩田銅吉	③一四四	明治18・4月			小幡　篤次郎
土生　秀	③一八一	明治18・10月？		平民	浜野　定四郎
梅田倉治	③一九九	明治19・1・21			梅田　波治
磯村豊太郎	③二一〇	明治19・3・3	鶯弐		津田　興二
水島耕太郎	③二二五	明治19・5・1		士族	飯田　平作
福田　清	③二二六	明治19・5・1	権六長男		浜野　定四郎
萩　九二男	③二三〇	明治19・4・30	貞長男	士族	萩　貞
大江達三郎	③二六四	明治19・10・1			浜野　定四郎
和田俊八	③二六五	明治19・10・1			浜野　定四郎
岩田徳太郎	③二七五	明治19・10月	角蔵長男	士族	外水　判平
桜井信四郎	③三〇四	明治20・1・6	恒次郎長男		桜井　恒次郎
水島節二郎	③三二〇	明治20・2・1	庄太次男		飯田　平作
中上川太郎一	③三二八	明治20・2・14	彦次郎長男	供小姓	中上川　彦次郎
山本和吉	③四二一	明治20・10・3	洋吾長男		山本　洋吾

氏名	入社帳巻頁	入社年月日	父兄及び記事	家格	保証人
奥村信太郎	③四六二	明治21・1・1	成岳長男(実は奥平昌邁男)		田沢　一
大坪富市	③四七九	明治21・1・1			大坪　文次郎
高橋茂澄	③五四八	明治21・9・12	晋策長男		飯田　平作
末貞武次郎	④〇一六	明治21・11月	友年長男		飯田　平作
末広栄次	④〇二一	明治22・1月			中島　精一
堀　英吉	④一六四	明治23・10月	兄藤造		浜野　定四郎
黒沢覚路	④一六七	明治23・10月	父庄右ヱ門	小役人	飯田　平作
嵐口正太郎	④二〇八	明治24・2月	伝吉長男		
鈴木恒三郎	④三〇六	明治26・2月	閑雲三男		小幡　筲次郎
和田好一	④三四四	明治27・1月	豊治　弟		磯村　豊太郎
中上川次郎吉	④二五三	明治27・9月　註	彦次郎次男	供小姓	中上川　彦次郎
山口龍吉	④四九九	明治30・1月	半七長男		猪飼　庶次郎
佐々木政二郎	④五四八	明治30・9月	勇太郎弟		武田　勇二郎
古宇田唯吉	④五五五	明治30・9月	与九郎次男		津田　純一
石坂良吉	④五七二	明治31・1・21	仁平次男		富永　忠治
田辺重彦	④五七三	明治31・1・22	百造長男		鈴木　千巻
中原哲夫	④五八七	明治31・2・8	熊太郎養子	供小姓	南　充
須田清徳	④六九三	明治33・4月	辰次郎長男		中村　丈太郎
鈴木四郎	④七〇一	明治33・4月	閑雲四男		
和田秀治	④七〇三	明治33・4月	角治弟		田中　萃一郎
山本　篤	④七五〇	明治34・5月	貞語　長男		桑原　虎治

註　中上川次郎吉は二四年一一月に氏名のみが記されているが二七年に本塾・幼稚舎の両入社帳に詳細に記されているので二七年入社とした。
なお、入社帳巻頁欄は初出のもののみを記した。
父兄については『入社帳』に記載が無いものも判明したものは記載した。

〔付表〕下毛郡出身者　入門年月日順一覧

氏名	入社帳巻頁	入社年月日	住所 父兄氏名	保証人
朝吹英二	①三七九	明治3・12月	宮園村　朝吹謙蔵	須田　辰次郎
佐知兼次	②〇七二	明治9・4月	佐知村89　佐知一郎長男	須田　辰次郎
曽木貞太郎	②〇七三	明治9・4月	曽木村419　圓治長男	須田　辰次郎
武藤常太	②〇七三	明治9・4月	東谷村622　士族　三郎長男	飯田　三治
小野敬次郎	②三八二	明治14・5月	大久保村平民　英八次男	東条　軍平
木村偲之助	②五〇三	明治15・9月	草本村　栄　二男	室尾　真作
今角　孟	②五二七	明治15・11月	角木村83　芳米長男	東条　軍平
金色良仁	③〇〇八	明治16・3月	向田口村866平民	中上川　彦次郎
朝吹常吉	③一一七	明治17・10月	英二①379長男	石河　香二郎
宮永熊吉	③一五一	明治18・5月	下宮永村平民	岡本　貞次郎
宮永半太郎	③一八三	明治18・10月	下宮永村平民	
河野魯吉	③一九五	明治19・1月	西谷村401　頼策長男	溝澄　常念
堀　陸良	③五三二	明治21・5月	高瀬村92　平民健蔵養嗣子	朝吹　英二
朝吹亀三	④〇二〇	明治22・1月	宮園村平民	亀井　祐治
守田聞多	④〇五六	明治22・5月	諸田村？　義七郎長男	大久保　慎次
亀井陸郎	④一七四	明治23・10月	鶴居村平民　玄理次男	飯田　平作
賀来駿一	④一七九	明治23・11月	大幡村82　平民判造長男	津田　純一
相良吉六	④四八〇	明治29・10月	下毛村73　平民	福澤　諭吉
曽木　晋	④四九八	明治30・1月	東城井村96　平民円次三男	中野　省吾
志永峰蔵	④五三五	明治29・12月	鶴居村462　才蔵次男	江藤　甚三郎
江藤直司	④五五二	明治30・9月	下郷村420　直純　孫	猪飼　麻次郎
末広遠慶	④五五七	明治30・10月	鶴居村28　間慶長男	朝吹　英二
朝吹孫三郎	④七八〇	明治34・9月	下郷村613　栄蔵三男	